

子どもの本 研究会

【私の一冊】

「やぎのズラター」

アイザック・B・シンガー 著

『やぎと少年』モーリス・センダック 絵(岩波書店より)

坂田 多美子



私は熊本に嫁ぎ、子育てを通して、今まで知らなかった世界を教えられ、広げてもらいました。様々な人や絵本、児童書との出会いもありました。この本も娘が入学した小学校の学校司書さんに勧められ、読みました。

「やぎのズラター」は『やぎと少年』という著作に収められているお話の一つで、著者はアメリカ国籍ユダヤ人のアイザック・バシエビス・シンガー、1978年にノーベル文学賞を受賞した世界的に有名な作家でもあります(ユダヤの言葉イディッシュ語で書かれています)。

― 毛皮職人のロイベン一家は暖冬で仕事がなくお金がありません。ユダヤの人々にとって大切なお祭りのハヌカを家族で祝うために、ロイベンは乳も出なくなったズラターという名のやぎを肉屋に8グルテンで売ることになりました。息子のアロンが町の肉屋にズラターを届けて、お金をもらってくる計画です。一人と二匹は町をめざして出発します。上気続きだったのに程なく雪が降りだし吹雪になってしまいます。このままでは命が危ないとアロンが神に助けを祈った時、雪でおおわれたほし草の大きな山を見つめます。自分に嫌なことをしないう人間を信じ切っていたズラターですが、この吹雪の中を連れまわされ疑心暗鬼になったものの、自分が大好きなほし草の家に連れてこられた安心します。ズラターはほし草を思う存分食べ、アロンはズラターのお乳を飲んで、吹雪の中ほし草の中で3日間一緒に過ごすのです。― (『やぎと少年』より要約)

この閉ざされた世界で、少年は売ってしまう(要らない)つもりのズラターがここに居てくれるその存在を慈しみと感じ、ズラターの「めええええ」という唯一の鳴き声には様々な意味がこめられていて自分と会話をしてくれていることに気づき、ズラターこそ今自分を支え暖を与え決して一人ではなく、助け手であることに気づくのです。まさしく信頼と愛そのものです。

この本の挿絵はモーリス・センダック。地味な本ですが、子どもたちにこの様な本を紹介したくて私はその後学校司書になりました。



(天津町立室小学校 学校司書)